



NPO法人 まえばし農学舎

「伝えたいことがある。本物に触れる特別な体験。」をコンセプトに、赤城南麓で活動する農家や職人が中心となって運営するNPO。農業体験を通して子どもたちの感性を育む「あかぎキッズファーム」や、赤城山の自然や食を楽しむ「ファームキャンプ」など、「農と食」を中心にした赤城山ならではの体験を提供する。「農業の大変さだけでなく、収穫の喜びや働くかっこいい姿も教えてあげたい」と林さん。

群馬県前橋市三夜沢町 534 とんとん広場内 Tel. 027-283-2983 (とんとん広場) maebashi-ngs.com



赤城山南麓にある、60年の歴史を持つ釣り堀。釣った魚はその場で炭焼きやから揚げにして食べることができる。



林牧場 福豚の里 とんとん広場

林智浩さん

大切なのは、ゆるく長く、持続できること

晴れている日、前橋の街からは広くて爽快な青空にくっきりと赤城山が見える。その麓、自然豊かで農業や観光業が盛んな赤城南麓エリアで、手作りハム工房・レストラン「林牧場福豚の里とんとん広場」を経営する林智浩さん(40)。取材場所を選んだのは、林さんが季節に一度は訪れるという釣り堀。ここから林さんの仕事場までは車で5分ほど。秋に入り、ちよっぴり冷たそうな水の中を、マスマイワナが元気に泳いでいた。

社人3年目のある時、ふと「地元へ帰ろう」と

「25歳くらいの時は、まだ東京で会社員でした。実家が商売をやっていて、それを手伝うのが嫌でこの街を出たわけですが、社人3年目のある時、ふと「地元へ帰ろう」って思ったんです」
アウトドア好きの林さんは、平日は東京で満員電車で揺られ、休日になると山に出掛ける生活を送っていた。都会へ出て、生活と自然との距離が近い故郷の良さを再認識しようだ。

「自分で商売をやりたいという気持ちは昔からありました。子どもの頃に見ていた、祖父母がたくましく働く姿が妙に記憶に残っていて、僕もそれに負けないくらい強い思いを持って仕事をしたいと思っていたので、Uターンを決めると同時に、家業も継ぐことを決心しました」

赤城南麓から世界一の生ハムを

「赤城南麓を生ハムの産地にしたい。そして、主力である骨付きの生ハムを武器に、世界一の生ハムを宣言したい。ハムの味は、その土地にしかない固有のバクテリアや乳酸菌のバランスで決まってくるので、同じレシピで作ったとしても土地によって味が変わる。このハムの味は、ここだけの味なんです。まずは僕たちの持っている生ハム作りのノウハウをしっかり確立させたい。そして、他の養豚農家から豚肉を預かって生ハムに加工したり、希望する方々にノウハウを伝えていくことで、生ハム文化を赤城南麓に広めていきたい。地元を一番大事にしつつ、世界一を掲げるうえで、銀座やニューヨークへの出店も、しないとダメですね(笑)」

自然となじむように、調和するように

取材中、笑顔や冗談を欠かさない林さんだが、自らの会社はもちろん、地域の事業にも積極的に関わり組み、考えなければいけないことや悩み事も多い。「落ち込んだり、悩んだり日常茶飯事。そんなときには一人で赤城山に登るんです。山でご飯を食べたり、本を読んだり、お酒を飲んだり。仕事後に登って夜を明かすこともあれば、早朝に登って仕事に行くこともありますよ」

ハム工房の仕事にとどまらず、仲間たちと(NPO法人まえばし農学舎)を立ち上げ、食育、農業体験、キャンプ等の自然体験を提供するなど、地域で精力的に活動する林さん。その根底にはどんな想いがあるのだろうか。

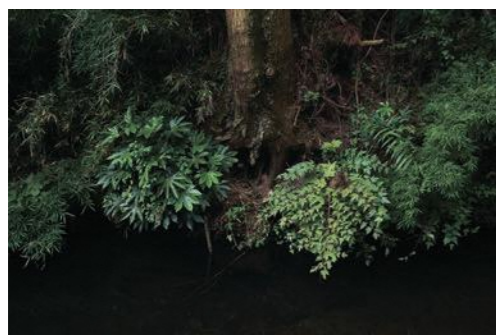
「前橋に戻ってきてから大きな出来事が二つありました。一つ目は、子どもの一人が難聴で生まれてきたこと。子どものために、何かが起こった時に助け合えるような関係を周囲と作らないとまずいなと思って。自分が困った時に助けてくれるだけじゃ、誰も助けてくれない。困っている人がいたら進んで助ける。こういうことは、子どもが生まれてからはかなり意識するようになりました」

二つ目は、会社でハム職人の仕事を見て自分も技術を身に付けたいと思い、ドイツのハム工房へ修行に行ったこと。日本の食肉文化は江戸後期に始まったもので、まだ歴史が浅い。それを日本の文化として根付かせていくために、長年培われてきた外国の文化や技術を学び続ける必要があります。そして、商品や料理もただ作るのではなく、ギフトのように想いを込めて作ることが大事だと学びました」

修行のため、ドイツを皮切りに、イタリア、スペイン、スロバキア、ハンガリー、フランスなど多くの国々のハム工房を巡ったという。

林さんが人生の多くの時間を過ごす赤城南麓エリアが平成29年5月、スロージンティとして認定された。宮城県気仙沼市に続き、日本国内では2例目となる。

「意識しなくてもずっと続けていられることが、スロージンティに大切なことなんだと思います。ゆるく長く持続できること。僕にとってのスローはやっぱりソロキャンプですかね。すぐ近くに山や自然のある環境だから、思い立ったときすぐに山へ登れる。それから最近では、道路沿いにあるお店のロードサインを少しずつ小さくしているんですよ。人工的なものが道に飛び出している状況って、改めて考えるとやっぱり良くない。自然となじむように、調和するようにするべきだと思ふんです。だって、赤城山の一番いいところは「自然」なんだから」



都会の釣り堀とは違い、林や小川などの自然に囲まれた環境もこの土地ならではの、多忙な林さんにとっていいリフレッシュの場となっているようだ。